

2023年7月16日（日）主日朝礼拝説教

『川を渡る』 井上隆晶牧師

ヨシュア記2章8～11節、3章11～13節、ヨハネ福音書9章1～7節

40年間荒野を彷徨ったイスラエルの民が、いよいよヨルダン川を渡って約束の地に入る時が来ました。約束の地に入ったのは、エジプトを出た民ではヨシュアとカレブの二人だけで、後は砂漠で生まれた新しい世代の人であったということは、**信仰がなければ、また古いままでは、神の国には入れないことを教えています。**このヨルダン川を渡る物語は、紅海を渡る話と非常によく似ています。どちらも水が出てきます。一方はモーセが民を先導しますが、一方は主の契約の箱が先導します。この契約の箱はキリスト自身を象徴しています。伝統的な教会では復活祭までの50日間（レント）と、復活祭後の50日間を分けています。復活祭までの50日間は、洗礼志願者の準備期間ですが、復活祭後の50日間は信者の信仰訓練の時でした。それを考えると紅海を渡る物語は、信仰を持つまでの歩みであり、ヨルダン川を渡る物語は、信仰者が神の国に入ってゆくための戦いを象徴しているものと思われま

①【神の業が現れないのは】

さて、二人の偵察がエリコの町を探るためにラハブの家に来た時、彼女は彼らをかきまいて、こう言いました。「**あなたたちがエジプトを出た時、あなたたちのために、主が葦の海を干上がらせたことや、あなたたちがヨルダン川の向こうのアモリ人の二人の王に対してしたこと、すなわち、シホンとオグを滅ぼし尽くしたことを、私たちは聞いています。それを聞いたとき、私たちの心は挫け、もはやあなたたちに立ち向かおうとする者は一人もおりません。あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです。**」（ヨシュア2:10～11）彼女は、神の偉大なみ業を耳で聞いて、主を信じると言ったのです。ここの個所について榎本保郎牧師はこう書いています。「今日のキリスト教の不振は、神学の貧しさでもなければ、人物の欠如でもない。神のみ業の貧しさであり、神ご自身の不在である。ある信仰書に『多くの霊的覚醒運動が終わりを告げるのは、人間の介入によるのである』と記されていた。人間がみ言葉のうしろに退き、み言葉に従って生きる時、主はそこでご自身の栄光をもって働かれるのである。…私たちは今日自分の能力や知恵でもって、人々を説得しようとするから、その伝道の業が進展しないのである。」

まことにそうだと思います。先日、カルト問題の全国連絡会があり、韓国から多くの牧師たちが来日され、会議に加わりました。その中で日本基督教団の救出方法と、韓国の教会の救出方法がまるで違うので対話が食い違いました。韓国は異端からの救いであって伝道を目的としていますが、日本基督教団は社会問題から

の救いを目的としています。日本基督教団では「異端」と言ったらいけないのです。でも単なる社会問題と闘うのなら共産党でもできます。韓国の牧師が「なぜ、脱会したのに教会に来ないのか」と質問すると、日本の牧師は「信仰の強要はしない」と答えます。確かに信仰の強要はよくありませんが、あまりにもキリスト教のすばらしさを伝えないのです。それでは救出をする意味がないと感じます。これがあらゆる社会問題に適応されます。悪と戦うのに、信仰で戦わないで人間の知識と学問と善意で戦おうとするのです。その結果として、信仰者が起こされなくなっているのです。「多くの霊的覚醒運動が終わりを告げるのは、人間の介入によるのである」私は信仰を学問や人間の善意にする人たちと共に歩みたくありません。面白くないからです。もう一度、基本に帰らなければならないのではないかと感じています。

②【ヨルダン川の水が干上がる】

ヨシュアとイスラエルの民はヨルダン川の岸まで来ますが、どのように川を渡ったら良いかが分かりません。ちょうど時期は四月初旬の頃で、春の雪解け水が流れ込み、ヨルダン川は水かさが増し、堤を越えんばかりに満ちていました。ヨシュアは「契約の箱」がどこに行こうとするのかを見ようとして、祭司たちに契約の箱を担がせ、900mの距離を取って後に続くように民に命じ、こういいました。「そうすれば、これまで一度も通ったことのない道であるが、あなたたちの行くべき道は分かる。」(3:4)そして祭司たちが契約の箱を担いで歩き始めると、主が言葉をくださいました。「あなたは、契約の箱を担ぐ祭司たちに、ヨルダン川の水際に着いたら、ヨルダン川の中に立ち止まれと命じなさい。」(3:8)そこで主の契約の箱を担ぐ祭司たちの足が水際に浸ると、川上から流れてくる水が、はるか遠くのアダムという町で壁のように立ったので、川は干上がり、民はヨルダン川を渡ることが出来ました。上流で土砂崩れが起こって、一時的に川の水がせき止められたからであろうと言われています。この出来事は私たちに何を教えているのでしょうか。

③【信じてまず一步前に進みなさい】

「主の契約の箱」がイスラエルの民を先導したのは、神は我々と共におられることのしるしでした。祭司たちの足がヨルダン川の水際に立った時に、水が退いたのは、キリストの力が死の力を征服することを示すと共に、私たちの信仰生活のいかなる困難も、キリストが道を開いてくださることを現わしています。川の水が枯れてから渡ることは誰でもできます。しかし川の水が溢れている時に、その中に入ってゆくことは信仰が無ければできないことです。しかし信仰とは自分の周りの状況を信じるのではなく、神の言葉を信じて、まず一步を踏み出すことです。私たちは自分を取り巻く状況が変わることを求めてしまいます。「人さえいれば、お金さえあれば、病気さえ治れば・・・ができるのに」そして状況が変わら

ないのでヨルダン川の岸辺で何年も過ごしてしまっているのかもしれませんが。しかし状況を支配しているのは神様です。神はその状況を変えることもできます。この世を見てはいけないと思います。計算してもいけないと思います。神様に向かって祈り、決断して、自分で正しいと思ったことを勇気を出して行わなければいけないと思います。

●日本イエス・キリスト教団の高原幸男先生から、ご自分が通っておられる北大阪教会の生い立ちの話を聞きました。戦後、野江にある長屋の一室で、疫病で夫を亡くされた S さんというご婦人の方が家庭集会を始められました。すぐに長屋の一室は人でいっぱいになりました。そこで教会を建てようという話になり、旭区高殿町の 10 坪ほどの土地を安く借りられることになりました。建築費用がなかったので、婦人は内職をし、男性はアルバイトをし、自転車で会社に行く時に、紐に磁石をつけて引きずって走ると、釘や鉄くずがつくのでそれを売り、昼夜を問わずみんなで頑張ってお金を作り、大工さんに渡して建築を依頼しました。いよいよ建築の日が来て、皆で待っていたのですが、何時間たっても大工さんは来ません。お金を持ち逃げされたのです。みんな失望落胆し、涙を流して祈りましたが答えはありません。集まった人たちはやがて心を新たに祈り始め、もう一度アルバイトをしてお金を蓄え、今度は建築することが出来ました。それでも間口は一軒、壁は一枚の板だけ、床は廃材で造ったので隙間があり、床にはゴザを敷いたそうです。冬は耐えられないくらい寒かったそうです。壁土を買うお金がないのでリヤカーを借りて、生駒山まで土を取りに行きました。コテが無いので、手で土を塗ったそうです。血が出て「自分たちの教会は宝だ」といって讚美しながら喜んで奉仕したそうです。そういう先輩たちの血と汗の苦勞があつて、今の教会があるのだと言うのです。

昔の人は本当に偉いと思います。貧しくても献げ、教会を愛し、奉仕しました。私の苦勞など苦勞に入りません。先輩に倣わなければ、そういう先輩にならなければと思います。苦勞をしなければ教会は建たないのだと思いました。そして信仰も育たないのだと思います。

主は「ヨルダン川を渡れ！」すなわち、あなたの前に立ちはだかっている大きな障害物に立ち向かえと命じられます。恐れる必要はありません。イエス様が私たちの前に先だって歩き、行くべき道を見せて下さるからです。ですからキリストに従い信頼して歩めばいいのです。「自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエス・キリストを見つめながら。」(ヘブライ 12:1~2) とあるように、主は旅の終わりに待っていて下さるお方であると同時に、旅の一步一步を共に歩いて下さる離れることのない同行者です。耳を澄まして主の声に従い、勇気をもって一步を踏み出したいと思えます。